

野辺の民間信仰・路傍の神々 V

村越 信子

(平成 15 年 10 月 2 日受理)

Images of Popular Belief in the Open Field : Wayside gods and Goddesses V

MURAKOSHI, Nobuko

(Received on October 2, 2003)

キーワード：ビルトシュトック、カルヴェール、カルヴァリオ、路傍の十字架像

Key words: Bildstock, Carlvaire, Calvario, Wayside cross

1. はじめに

チロルの歴史は、エトルリア人との琥珀交易の時代やハルシュタット鉄器文化時代にすでに始まっていたようである。

チロルはオーストリアの南西端に位置する一州で、ヨーロッパを南北に隔てるアルプス山脈の中央部、やや東にある。東をザルツブルグ州（キッツビュール山脈）、南はエッターアルプス・ツィラタールアルプスでイタリアとの壁をつくり、西をスイスとフォアアールベルグ州（シルヴレッタ山脈）、北をドイツ（ババリア山脈）と境を接している。

スイスを源流とするイン河がチロルの中央を西から東へと貫通し、そのイン河に向かって、その昔氷河が切り開いたたくさんの渓谷（タール）が横たわっている。

チロルの気候風土は厳しく、土壌は貧しい。岩地に泥を貼付けるようにして牧草を育て、牛を飼う生活は、過酷な労働を伴うものである。かつて村々は山々に隔てられ、孤立した自給自足の生活を強いられた。そのためか谷筋ごとに方言や家屋の建て方、民族衣装などに違いができ、独自の文化を育んで、今に伝えている。

この困苦に耐える心の支えは、強いカトリックの信仰心であろう。調査研究を続けている各国のビルトシュトックはキリスト教を基盤に成り立ち、多くは自然環境の厳しい地域、特に山岳地帯に多く点在しているので、このオーストリアの西部に位置するチロル地方には大きな期

待を持っている。〔地図 1〕

ビルトシュトックの出現は、13～14世紀とされ宗教的記念碑から石の十字架像とかかわり、各種の要素が混じり合い一体となって、思想的、宗教的に発展して来たものと考えられる。（東京家政大学研究紀要40集p.170記載）これらの谷々には、「野辺の民間信仰・路傍の神々」が点在する条件が整っているので、谷の気候や風土、生活を踏まえビルトシュトックの形状、設置場所など、谷ごとに地域を12か所に分類し、アンケートの回答を参考にしながら、現状を取りまとめ比較検討を試みた。

2. 路傍のビルトシュトック

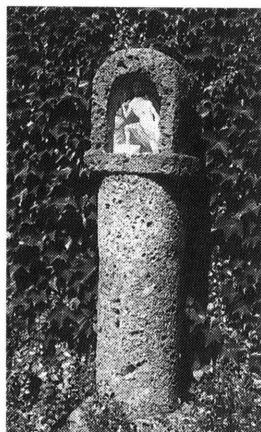
(1) ミーミンガー山地〔写真 1～5〕



〔写真 1〕 ゼーフェルト



〔写真 1〕の内部

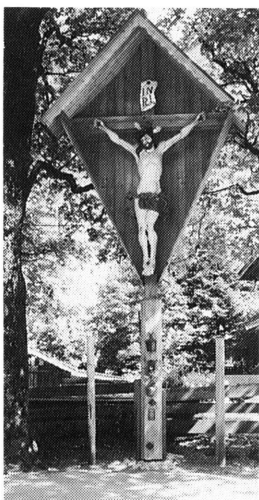


〔写真2〕 テルフス



〔写真3〕 ビーバーヴィーア

テルフス (Telfs) の教会の近くには古びた石製の灯籠型のものを発見。この地域には形状も豊富なビルトシュトックが点在するのには驚かされる。ウンターミーミング (Untermieming) への分岐には大きな聖人像を納めた祠型、モーツ (Motz) への分岐の小高い丘には教会型が建っていた。その中には純白のテーブルクロスの上に真っ赤なロウソクが灯されていた。ま

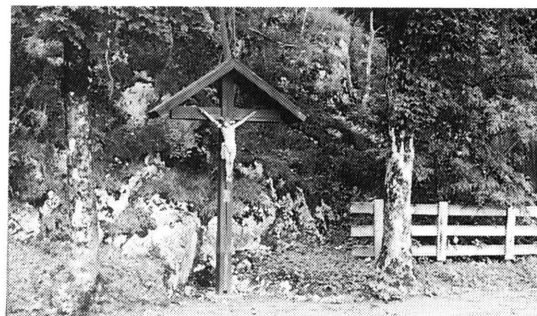


〔写真4〕 ビーバーヴィーア

たこの付近の十字架型には屋根だけで背面がないものが目立った。

フェルンパス (Fernpass) を下ったビーバーヴィーア (Biberwier) は小村だが各種のビルトシュトックに数多く出会うことができた。

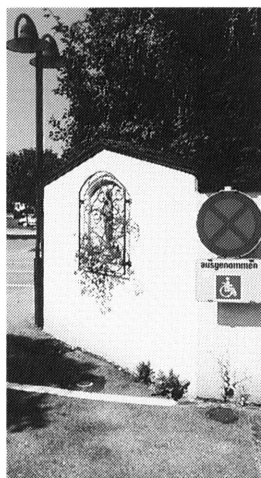
インスブルックの西方、イン河の北側に広がる山地ツィールル (Zirl) からゼーフェルト (Seefeld) 経由で街道に入る。早速巨大な祠型に出会う。その天井には聖堂の天井と見紛うばかりの立派なフレスコ画が施されていた。また木製の巨大な祠型か、教会型にすべきか迷うものもあった。交通量の多い街道に設置されていた。



〔写真5〕 ビーバーヴィーア

レアモース (Lermoos) の村外れの丘の上に教会型、その前に3基の十字架型が建ち、丘へ登る道に沿って祠型が等間隔で7、8基建っている珍しいものがあった。

(2) レヒタール〔写真6～11〕



〔写真6〕 ロイッテ

ロイッテ (Reutte) は外壁にフレスコ画が描かれた建物が目立つ。ポストの駐車場の塀にマリア像を納めた祠型があった。

プフラッハ (Pflach) の周辺にはマリア像の噴水や教会型のもの、十字架型などが確認できた。198号線を進み、ヴァイゼンバッハ (Weissenbach) には、十字架型の立派な作りのものが随所に点在しており、さすが木彫の盛んな土地である

ことを実感。水場の聖人像もなかなか良い表情をしていた。村外れの牧草地の真ん中にもベンチを伴って建っていた。

広々と見通しの良い道を進む。フォルシャッハ

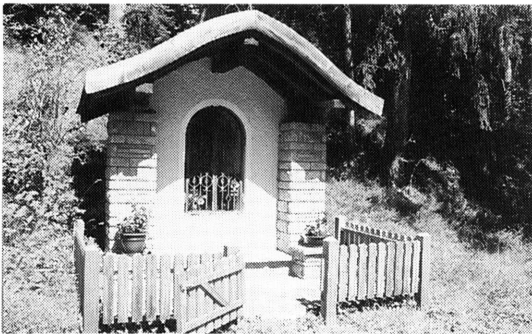


〔写真7〕 ヴァイゼンバッハ



〔写真8〕 ナムロサタール

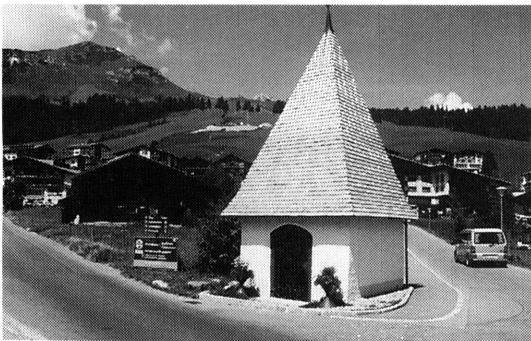
〔写真9〕 バッハ



〔写真10〕 バッハ

(Forchach) 村の民家の脇に建っている教会型には鐘が取り付けられていた。

シュタンザッハ (Stanzach) から脇道を東に入ったナムロサタールには、素朴な作りのものが立ち木を利用して取付けられていて、他では見かけないタイプのものではあった。本道に戻り納屋の外壁に取付けられたもの、十字架の大きさと不釣合な、小さなキリスト像を付けたものを確認。



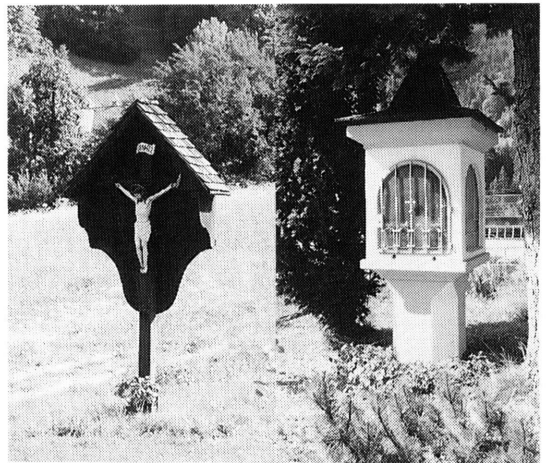
〔写真11〕 レッチ

ヘッセルゲアー (Haselgehr) を過ぎると木彫の村エルビゲンアルプ (Elbigenalp) のバロック教会と礼拝堂を見学したが、礼拝堂の壁面にはキリスト受難の等身大の木彫が設置されていた。バッハ (Bach) 村の橋の中央には大きな聖人像、村の中央には、巨大な十字架にキリスト像以外に沢山の武器や道具類を取付けた珍しいタイプのものが建っていた。これは各種の職業を表す品々のものである。村外れには木製の垣根で囲まれた立派な祠型を確認。レッヒ町の分岐には四角錐の大きな屋根の祠型が建っていた。

(3) バツナウンタール [写真12~15]

スイス領に近いモンタフォン (Montafon) からバツナウンタールは人口も多く、フェーン現象が有利に働くため、谷の内側では中腹まで果実の栽培が可能であり、また高地の放牧地では当地原産の品種である赤茶色の雌牛が立派に育つ裕福な谷である。

交通量の多い188号線を南東へと進み、谷も幾分狭まって来たザンクト・ガレンキルヒ (St.Gallenkirch) の周辺にはキリスト像が小さなもの、大きなものとバラエティに富んだ十字架像が点在していた。バルテネンの手前には、この地域では珍しい果箱型 (ガラス付き) があった。また丸太を削り貫いた中に聖人像を納めた祠型とも云うべきものもあった。



〔写真12〕 ザンクト・ガレンキルヒ

〔写真13〕

さらに広々とした草原状の丘陵を登って、フォアアルベルク州とチロル州との境界であり、北海と黒海の分水嶺となっている標高2,036mのピーラーヘーエの峠に着く。眼前にジブルレッタ湖の神秘的なブルーの湖面とジブルレッタホルンやピッツブインなどの氷河が迫って



〔写真14〕 ガルテュア



〔写真15〕 ガルテュア

くる。峠の高台には教会が、そしてその脇には石造りの祠の上に十字架を付けたビルトシュトックが鎮座ましましていた。

パツナウンターを下るとガルテュア (Galtür) 標高1,584mの集落である。この集落の教会には、平日の朝も礼拝に集まる人々の姿が目立つ信仰の篤い村である。そんな村には各種のビルトシュトックが点在していた。この辺りで見かける十字架型は綺麗に彩色されているものが多かった。

(4) オーバーインター・カウナタール〔写真16~18〕

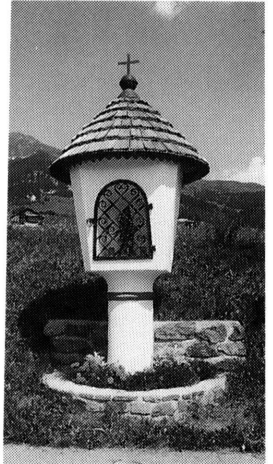
スイスやイタリア方面への国際的な315号線から枝道に入って調査を進めた。山腹を巻くように進む狭い地方道を南下するとフィス (Fiss) の集落の入口に、この地域では珍しい巣箱型を発見。さらに村の分岐には、聖人像のある水飲み場 (木製の樽状)。その先のゼアタウス (Sertaus・標高1,427m) には、祠型和十字架型とが並んで建っているものがあつた。また狭い通路の壁面に埋め込むように大きな祠型など。



〔写真16〕 ゼアタウス

プルツ (Prutz) から東に転じ、カウナタールに入る。オーバーインタールの国際道路とは打って変わって交通量が激減した。ファイヒテン (Feichten) の集落の入口には Kristus 像が大きく真っ白に彩色された十字架像が目立った。またこの集落には巣箱型などもあって沢山のものに出会った。

谷の奥を目指して車を進める。この沿道にも鮮やかに Kristus 像が彩色されていた。



〔写真17〕 ファイヒテン

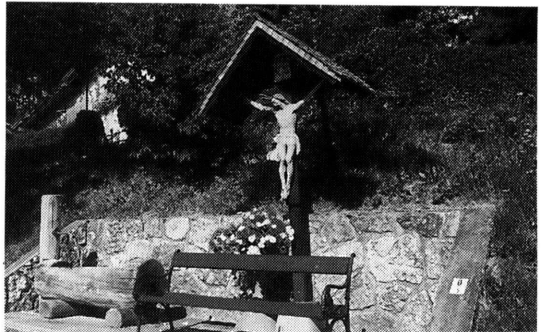


〔写真18〕 ファイヒテン

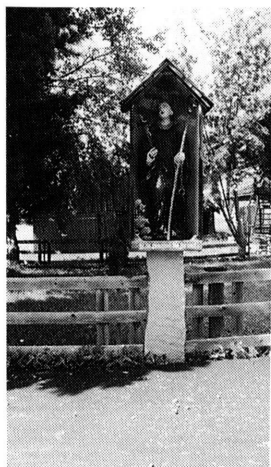
(5) ビツタール〔写真19~22〕

カウナタールとエッツタールとの間に位置する北から南に細長く延びた溪谷である。

イムスト (Imst) の外れのアルツル (Arzl) から谷の一番奥のミッテルベルク (Mittelberg・1,736m) まで約40キロである。ヴェンス (Wenns) がカウナタールとの分岐となる。村の入口の水飲み場には大きな十字架型が



〔写真19〕 ヴェンス



〔写真20〕 ヴェンス



〔写真22〕 ピオスメス



〔写真21〕 ピオスメス

花に飾られてベンチの奥に立っていた。また外壁にフレスコ画が目立ち、水飲み場の聖人像、橋の袂の聖人像など沿道で沢山のものに会った。

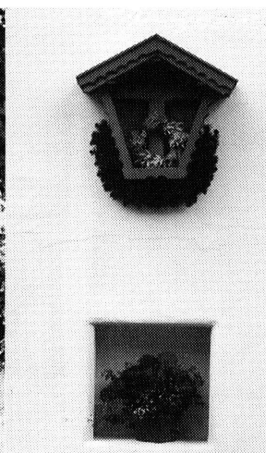
ザンクト・レオンハルト (St. Leonhard) の入口に大きな祠型があった。ピオスメス (Piösmes 標高1,391m) の入口の丘の上の教会への坂道に、等間隔に真っ白な祠型が立ち並び、その教会の前にはマリア像を納めた洞窟があった。この地域の一種の聖地なのであろう。もちろん集落の出入口にも立派な十字架型が建てられていた。ブランゲロズ (Plangeross) の入口の十字架型は、鮮やかなブルーのバックに真っ白なキリスト像がくっきりと浮びなかなか見事な造形美である。

(6) セルライントール・リーゼントール 〔写真23～25〕

エッツェラウ (Oetzerau) の集落の水飲み場にはキリストを抱いた聖人像、狭く急な集落の道沿いに十字架型と続く。河沿いの開けた道となり、放牧された牛が我がもの顔で道路を横切る。ドルトムンダー・ヒュッテ (Dortmunder. H) の小さな湖を過ぎると、谷はますます



〔写真23〕
ザンクト・ジグムント



〔写真25〕
プラクスマール

す広がっている。牧草地の斜面の遥か上に十字架型が見受けられた。

ザンクト・ジグムント (St. Sigmund) の集落の出口の十字架型は、十字架の左右に槍と斧のような付属品が付いたものがあった。

グリース (Gries) から枝谷、リーゼントールへと南下する。残念ながら沿道にはビルトシュトックは発見できなかったが、谷の道路の終点、プラクスマール (Praxmar) の集落には十字架型や壁面に取り付けられた十字架に出会うことが出来た。本谷へ戻る手前で大きな教会型を確認。東へと車を進めて、セルライン (Sellrain) の集落で住宅の壁面にモダンなレリーフ状の十字架型を発見。さらに町中の分岐には教会型が建っていた。

アクサマス (Axams) の入口には大きな教会型、さらに住宅地の分岐には十字架型と、この谷では各種のタイプに出会うことが出来た。



〔写真24〕 アクサマス

(7) エッツタール [写真26~30]

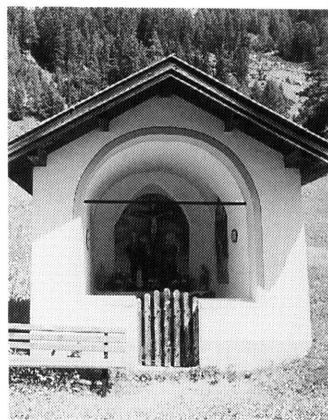
イン河へ南から流れ込む支流の中で一番奥深い谷で50キロにわたる渓谷が続いている。

谷の入口の村はエッツ (Oetz) である。この村は、フレスコ画の壁絵の美しい家並が目を引く。トゥンペン (Tumpen) の集落には、木製の祠型の中に2基の十字架が納められた珍しいタイプのものを発見。

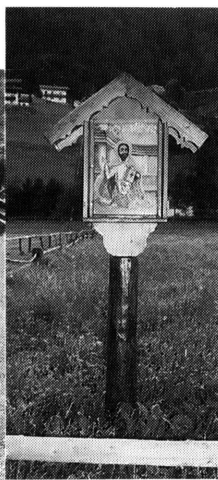


[写真26] ランゲンフェルト [写真27]

ランゲンフェルト (Langenfeld) から東へと枝谷に入る。九十九折りの坂道を登りきった峠の茶屋の庭先には教会型が建っていた。ここからは広く開けた牧草地となり、その一角には石製の灯籠型にマリアの写りが飾られたものが建っていた。その先の集落グリース (Gries) の入口には祠型、さらにその先の公園には果箱型と、横道に入った成果十分であった。

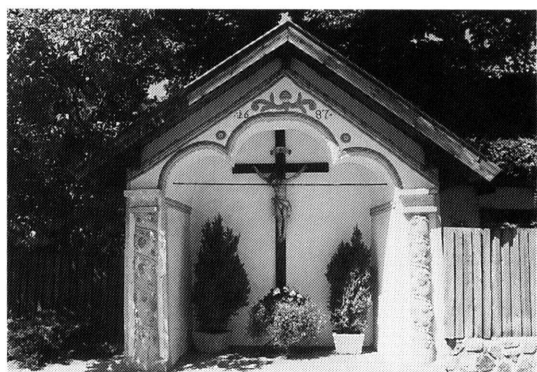


[写真28] グリース



[写真29] セルデン

本道186号線に戻り南下すると、ぶどうの蔓の飾りのある大きな祠型。さらに進んでホッホヴァルト (Hochwald) には巨大な変形祠型を発見した。



[写真30] ホッホヴァルト

(8) ティンメルスヨッホからブレンナー峠へ

[写真31~32]



[写真31] サン・レオンハルト

幾つものトンネルを抜け、高度を下げていく。ここでイタリア側最初の祠型を発見。キリストを抱いたマリア像の額に沢山の花々が供えられていた。分岐となるサン・レオンハルトの道路沿いの岩肌にモザイクのマリア像に白い花々とロウソクが供えられ、その近くに十字架型も建っていた。ヤウフェン峠を経てブレンナー峠に出る。このブレンナーは南と北を繋ぐ大動脈として古代から栄えた峠の集落



[写真32] サン・レオンハルト

であり、大きな祠型や十字架型が点在していた。

(9) ビップタール(グシュニッツ・シュトゥバイ)
〔写真33～37〕



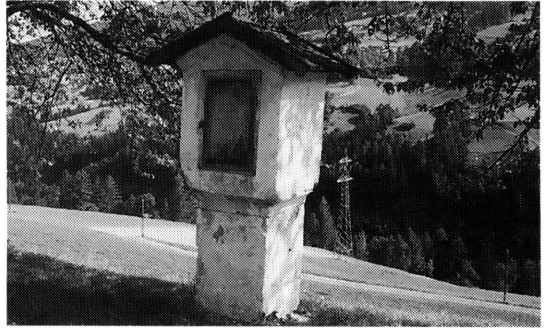
〔写真33〕 シュタイナッハ 〔写真34〕 グシュニッツ

ブレンナー峠からシュタイナッハ(Steinach)を経由して、枝谷のグシュニッツタールへと西に車を転じる。ほとんど交通量の少ないどかな田舎道を進むと随所に十字架型が目止まる。道が狭まり放牧用の垣根が続き、グシュニッツ(Gschnitz)の集落に入る。広々と広がる牧草地にカラフルなフレスコ画が鮮やかな家々が点在し、牧草地の真ん中の祠型、家の壁面の十字架像、垣根沿いの十字架型と沢山のものに会った。この集落で道は終わった。

182号線をシェーンベルク(Schonberg)で北西へと転

じ183号線を進む。ミーデルス(Mieders)の集落の入口にキリスト像の小さな十字架型が建っていた。その先には巣箱型もあった。古くから金属職人の村として有名なフルプメス(Fulpmes)に立ち寄り、期待していたが村内には特に目立ったものはなく、村の出口に十字架型とだいたい古びた巣箱型があっただけであった。

谷の中心地ノイシュティフト(Neustift)の入口に大きな十字架型が建っていた。



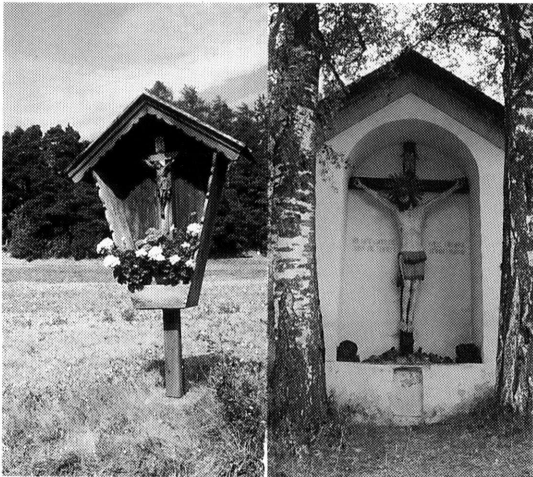
〔写真37〕 ミーデルス

(10) ツィラタール〔写真38～45〕

チロルの数ある溪谷の中で、ひととき幅の広い谷である。広い田園風景の中をツィラー川に沿ってSLがピーと甲高い汽笛を鳴らして走るのどかな谷でもある。

チロル州で一番人口密度の高い地域であり、南北約60キロの谷である。アッシュアウ(Aschau)から集落の中を走る地方道を進む。この集落の十字架型2基と門構えの祠型、さらに灯籠型も確認できた。

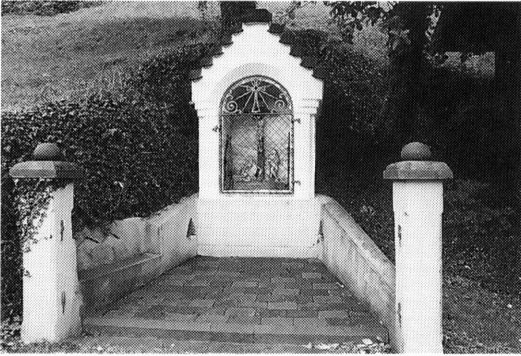
谷の中心地で鉄道の終点のマイヤーホーフエン



〔写真35〕 グシュニッツ 〔写真36〕 シェーンベルク



〔写真38〕 アッシュアウ 〔写真39〕



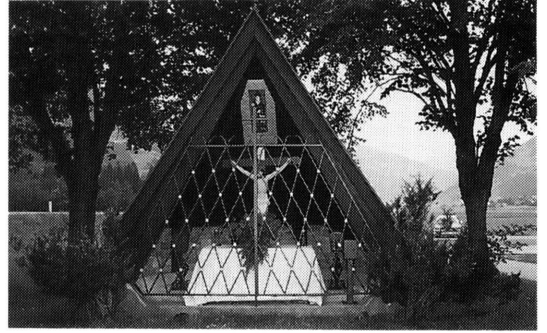
〔写真40〕 アッシャウ

(Mayrhofen) の入口には、巨大な祠型、村内には十字架型・巣箱型などが建っていた。ここから右の谷、トゥクサタールへ入りヒントートゥクス (Hintertux) へと向う。途中2基の十字架型を確認できただけであった。人口密度の高い谷であるが他の谷と比べてビルトシュトックの数は少なく感じられた。しかし堅牢な印象を受けた。



〔写真41〕 ラムザウ

〔写真42〕



〔写真43〕 マイヤーホーヘン



〔写真44〕 マイヤーホーヘン

〔写真45〕

(11) アッヘンタール 〔写真46〕

イエンバッハから北へ181号線がドイツ方面へと延びている。マウラッハ (Maurach) の分岐には十字架型が湖畔のSLの終点の付近の公園にも十字架型を確認。ドイツ方面への道から外れ、湖の反対側のペルティザウ (Pertisau) へと進む。村内のホテルの庭先の十字架型、村の奥の住宅地の十字架型と2基を確認しただけである。また、湖の辺りのガイザイム (Gaisaim) の船着き場の付近で十字架型を確認できた程度であった。



〔写真46〕 ペルティザウ

(12) インスブルック周辺〔写真47～48〕

イン河を利用してハルは岩塩の町として栄えた町である。町中には巢箱型、商店の壁面に巨大な十字架型、城壁の角にも巨大な十字架型などに会った。

街道に出て171号線(イン河の北側)をインスブルックへ向って西へと進む。沿道の巨木の間に、巨大な(約2.5m)石造りの古びた灯籠型が約100m間隔に鎮座していて、次々に現れ10基を確認。幹線道路とあって交通量は凄まじい。インスブルック市内171号線に入ると灯籠型は途切れたが、郊外の空港付近まで来ると同じタイプの灯籠型が2基確認できた。ハルの町から続くこの街道そのものに大きな歴史があることを実感する。この灯籠型が何を意味するかは大変興味深い。



〔写真47〕 ハル

〔写真48〕 ハル

3. チロルの地勢(まとめ)

チロルの景観は素晴らしい。然し自然環境の要素の寄せ集めではない。至る所に人間の営みが加わり、それらが、それぞれの谷の独自の景観を生み出している。

無視できない観光開発や斜面保護の問題、土地利用のあり方など、その谷に住む人々が厳しい自然と向き合って造り上げてきた景観である。

その景観の中には、人口の90%がカトリック教徒であるお国柄であることや深く根づいた民間信仰が、路傍や集落、牧草地域にはっきりと現れていた。

今回ビルトシュトックを約250基取材することができた。オーストリアの一州であるチロルをより理解するためにA独立した溪谷社会、Bフェーン・ガッセ、C四季の行事、D路傍の神々の4項目にとりまとめた。

A. 独立した溪谷社会

チロルの谷は、その昔北欧のアレマニア族やバジェヴァリ族、スラブ族、西のスイス地方からラディナ族、南からはローマ族が入り込んで来た。その人たちは、それぞれの谷に独自の社会を形成し、他の谷とは全く独立した形をつくっていた。

近年まで、隣の谷の人とは結婚しないと云う伝統が守られて来たようである。山一つ越えた隣の谷を訪れると家の建て方や風習、人の容貌のちがいが感じられることも多い。

イタリア国境とのブレンナー峠からインスブルックへ向う枝谷のグシュニッツタールのガストホフ(宿屋)の家族は容貌や言葉から先祖はイタリア系だと推測できた。

近年まで、雪に閉ざされる半年以上の間、男たちは木工製作(家具、調度品)を冬場の仕事としていた。春先の雪解けを待ってそれらを売りに出掛けて現金収入を得ていた。現在はスキー客相手の観光業の仕事も多いようである。売れる家具を作れない者は、当時は一人前の男とは認められないと云う伝統があったが、現在でも伝統として、この家具作りは生き続けている。嫁入り道具や子育て用の家具は、父や兄の責任であり、花嫁は母と一緒に裁縫や刺繍に精を出して、それらの民族衣装などを家族の手作りの箆笥や長持ちに入れて持っていった。

子育て用の揺りベッドは、村によっては、コンテストが行われ、若い父親たちの技術の向上の一助となっている。出来上がった揺りベッドは教会へ持ち込み神父さんから祝福を受け、赤ちゃんが元気に育つようお願いを込めて祈るのである。

インスブルック市内にあるチロル民族芸術博物館には、18世紀の家具や調度品が谷筋ごとに保存、展示されていたので、形態・大きさ・図柄などの様式の違いが判り、谷ごとに独立社会を形成している様子が理解できた。

この冬場の家具作りは、あくまで副業であるから専門の職人のようにはいかず素朴な出来映えの家具でもある。谷ごとの図柄の特徴があるが、浅い彫刻や絵画的な彩色で、アルプスの山々や森、草花、動物、牧童、童女などをモチーフとしている。しかし家族への愛情が感じられる堂々とした家具である。

19世紀に入って工場生産の家具におされて、一時途絶えたが20世紀に入り、谷ごとの特徴を持った民芸風の味わいの手造りの良さが見直されている。

B. フェーン・ガッセ

フェーンと呼ばれる暖かい山おろしが一番猛威を振るうのはアルプスの北斜面、ライン河、ザルツァッハ河イン河などで、このチロルの谷にもやってくる。

アンケート調査より(3)パツナウンタールは頻繁に通り、ドイツに近い(1)ミーミンガー台地の西側(2)レヒタール(7)エッッタール(10)アッヘンタールなどもフェーンの通り道になっている。(2)レヒタールの枝谷ツークタール(5)ピッツタールはまれにやってくる。フェーンのない地域は(4)カウナタール(6)セルラインタールの東側(9)ビップタールであった。

冬の終りに一度だけ吹くとは限らず、二度三度と繰り返してやってくることもある。それはチロル全土に吹きまくる風ではなく、限られた谷に決まって毎年吹くのである。フェーンが通る谷、通らない谷との違いは大きい。

気象学的には理解しにくいので、体験した人のあらましを記してみた。「スキーを終えて昼食後、急に陽が陰ってきて寒くなった。下山するときに気づいたのは、雪の表面が昼間なのに、丁度夕方の雪のように固くなってきたし、風が吹いて来た。それが一刻一刻と冷たくなっていく。やっとのことで村に辿り着く。村人たちは忙しく非常警戒態勢をとっている。その時、突然今までの北風がパタリと止んだ。今度は急に暑くなり、蒸し暑さが増えて来た。やたら喉が乾く。速くの方から雷のような音が聞こえてきた。外はさっきまで霞でぼんやりしていた山々が、はっきり見え、山の稜線がくっきりと空に映えて見える。岩嶺のたたずまいが鮮やかさを増し、まるで夏山のようにだと想っていると、今度は恐ろしい南風が吹いてきた。それが地響きを伴う勢いで、村の家々を揺すぶった。」フェーンは大抵二三日吹き続き溪谷をさんざん荒らし捲った挙げ句、今度は雨を降らせる。その雨もいわゆる土砂降り、集中豪雨といった大雨である。小川は溢れ、橋は流され、瞬時にして辺りは水浸しとなる。野を覆った雪も、はじめのフェーンの熱風に続いてこの大雨で、すっかり解けてしまう。何が飛んでくるか判らないので、決して外に出ない。そして絶対にタバコを吸わないのである。屋根の瓦板が摩擦で燃え上がって一集落が消失した例があるからである。それほど恐ろしい熱風である。この時のフェーンも4日目に静まって、誰の顔にも安堵の色が見えた。

とにかくフェーンは、たいへんな破壊力をもった恐ろしいものである。しかし、もしこのフェーンが来なかつ

たら、チロル一帯の春は6月にならねば来ないだろう。雪解けを早め、家畜たちはアルプスの高山放牧地の新鮮な草を例年よりも早く食むことができ、谷によっては通常の植生帯を大幅に越えてトウモロコシや果樹の栽培が可能などとも出てくるとのことである。

フェーンの通る谷と通らない谷とは、雪に長く閉ざされるのと春が早く来るのとの違いは、まず経済的条件も大きく違ってくるだろう。フェーンの通る谷は地味も豊かだから、経済状態も良好である。フェーンの通らない谷では、一年の大半は雪に埋もれているので、住民の生活も貧しく、自然の過酷な条件のもとで耐え忍ぶ生活が強いられる。このフェーンは、我々が台風に対して抱くような感じとは異なるようである。

日本ではフェーン現象といって、空気の乾燥状態を云っているが、チロルではあくまで吹きすさぶ南風、春の先駆け熱風そのものをさしている。

C. 四季の行事

チロルの四季は、宗教行事にはっきりとあらわれている。宗教行事に則った祭りの行事は、年間をとおして生活の一つ一つの区切りとして行なわれている。

謝肉祭(2月上旬～3月上旬)は、春を呼ぶ祭りである。春の精や冬の精が踊り舞い、豊穡を願うのである。この頃はまだ雪は深いが、陽の光はたしかに春の訪れを告げている。そして復活祭(3月下旬～4月下旬)が近づく。イエスキリストの復活にちなんで、多産、繁栄のシンボルである色とりどりの卵や兎型のクッキーが沢山作られる。

教会では十字架から降ろされたキリストが祭壇に横たえられ、その周りを飾る(ハイルゲングレーバーという)。復活祭当日は教会に集い厳粛なミサをあげる。

この頃になると、陽射しは日一日と長く強くなり、雪の消えゆく牧草地にはクロッカスが一面に花を咲かせる。雪が消えると、あっという間に牧草が伸び出す。4月23日は家畜や番犬の守護神、聖ゲオルクの日である。ひとと冬を家の中で過ごした牛や羊を外に出す。主婦は窓辺に飾る花の準備に精を出す。花で家を美しく飾るコンクールが毎年あり、主婦の腕の見せ所である。

5月1日はメイポール(五月の柱)の日。そして昇天祭、聖霊降臨祭、聖体祭といった教会の祭事が続く。これらの行事を区切りとするように、チロルの村々には夏に向って忙しくなる。

家の周りにいた牛や羊を、アルムと呼ばれる山の上の

牧場へ連れて行く行事は、チロルの夏を迎える風物詩である。6月の夏至の日は、聖ヨハネの日。7月中旬、山の上で火を焚いてお祝いをするのは聖ヤコブの日。

チロルの秋は駆け足でやってくる。観光客の姿もまばらになり静かな自然が移り行く。9月中旬になると、アルムの牛や羊を里に下ろす。アルムアブトリームと呼ばれる秋の最大の行事である。

アルムの小舎で幾日もかけ牛の頭飾りを作る。この頭飾りは牛を悪霊から守るためである。牛が帰った村では市がたつ。そこでは農家の人々が素朴な料理を作ったり、牛の顔の形のクッキーも売られている。さながら秋の収穫祭だ。これが終ると冬の支度で忙しくなる。秋が深まるにつれ陽は日一日と短く弱々しくなっていく。

里に雪が降る頃の11月1日の万聖節には、墓地を掃除して花を飾り、灯明をあげて翌日の万聖節にそなえる。

万聖節は死者の霊がミサのために墓地に帰ってくるといわれ、お墓参りの姿が一日中絶えない。その日が過ぎるとクリスマスに向けての準備が始まる。

オーストリアのクリスマスは家族揃って、主婦のご馳走を食べて静かに祝う晩である。年が明けて1月6日は公現節、東方三博士の来訪を祝う日だ。子供たちは星を付けた棒を手に、冠をかぶりマントを纏う。顔を黒く塗った子が三博士の一人カスパールになり、子供たちは家々を廻って入口の框にC+M+Bを白墨で書く。これは三博士の頭文字だが、人々はそれを魔除と信じている。子供たちはどの家にも歓迎されて、何がしかの心付けを貰う。C+M+Bの魔除の文字は、半年たった夏になっても我々の目に止まった。

宗教行事である祭りは、年間を通じて生活の一つ一つの区切りとして行われてきた。そしてこれらの行事もフェーン・ガッセにより、その谷の気候に即した時期に行われ、全土画一的ではない。この祭りを見たいと思う観光客にとって、他の谷でも翌日見物できるという便利さもある。

D. 路傍の神々

道は人間の最も素晴らしい創造物の一つである。さまざまな民族が独自の考えで作ってきたが、その道は全ての人々にとって共有であり、とどまることなくどこへでも通じていて、生活に密着していた。

今回チロルの谷筋を時間の許す限り実地踏査を試みた。街道の大木の根元に立つ灯籠型、分岐に建てられた教会型、橋の袂の聖人を納めた巣箱型、集落の出入り口に立つ十字架型、丘の上の教会へと続く祠型の列など沢山の

ビルトシュトックに出会うことができた。

チロルのビルトシュトックは、一番数が多かった十字架型、次に目立った祠型、数は少ないが見事な造りの灯籠型、巣箱型はわずか2基、各集落に点在していた礼拝堂と混合しやすい教会型とバラエティーに富んだものであった。

1. 十字架型…磔刑像に木製の屋根と背面が付いたものの、屋根だけのもの、キリスト像が彩色されているもの、白木のままのもの、と地域性があるようだ。キリスト像の首の曲げ具合など谷ごとに特徴があるようである。フランス（東京家政大学研究紀要第42集）に多い金属製の十字架型は存在しなかった。

2. 祠型…木造の巨大なものや石造りのもの、木製の垣根付きのもの、鐘が軒に取り付けられたものなど形態も多様である。中に祭られているキリスト像を中心に、マリア像や聖人像、マリア像のみのものなどである。

3. 灯籠型…初期のビルトシュトックの流れを汲むと思われる石造りである。上部の窪みに色鮮やかに聖書の物語などの一場面が描かれていて、随時、描き直されていて鮮明である。大きさも2.5m～1.5mほどである。

4. 巣箱型…巣箱の4面に彩色した聖書の物語が描かれている。正面のみにガラスが嵌め込まれ聖人像やマリア像が納められているものがあった。

5. 教会型…村の辻、三叉路などに建てられ、いずれも真っ白な壁面を持った瀟洒な建物で、よく手入れがされている。内部に礼拝のためのベンチが一、二脚設置されているもの、外に休憩用のベンチのあるものなどがある。内部は、キリスト像だけのもの、キリストの両脇にマリア像や聖人像のあるものなど、何時でも迎え入れられるよう、花々やローソクが供えられていた。

6. その他…ほとんどの集落で見かけた水飲み場には、聖人像やマリア像が必ず設置されていた。村の人々や家畜、また旅人が立ち寄る大切な場所に安全を祈願してのものであろう。ビルトシュトックと同じ役割を果たしていると考えたい。

4. 結 び

オーストリア・チロル州の縦谷・横谷を十二分に実地踏査を試みた。各種多様なビルトシュトックに出会ったが、今までにない（総面積や移動距離より）250基という膨大な数である。

仮称、十字架型・祠型・灯籠型・巣箱型・教会型と分

類してきたビルトシュトックは、集落の出入口、橋の袂、街道の分岐、三叉路、農地や牧草地の境界線、巡礼者たちのための礼拝堂への道筋など随所に見ることができた。

ビルトシュトックは、宗教的意義の表現であるが、もう一方には人々が集落をつくり、社会を形成した時から、その集落の中に悪霊や受難が入り込んで来るのを防ぎ、それぞれの安全を祈願するための信仰が伝統として生きていた。

スペインに見られた地母神と一体となってアンナ（マリアの母）信仰やマリア信仰の盛んことが大変印象的であったが、このチロル州では、9割はキリストの磔刑像のビルトシュトックであった。

キリストの磔刑像に数多く接しているうちに地域により特徴があり、形は磔刑像ではあるが足の組み方や頭部の位置、うなだれ方のちがいらかキリストの表情は違って見える。

チロル州の東寄りのツィラタールの十字架像のキリストたちは、どれも実に柔和な表情をしていた。この谷のキリストは白色に彩色されているからだろうか。苦悶の色はなく、死の安心といったおだやかな表情が感じられた。

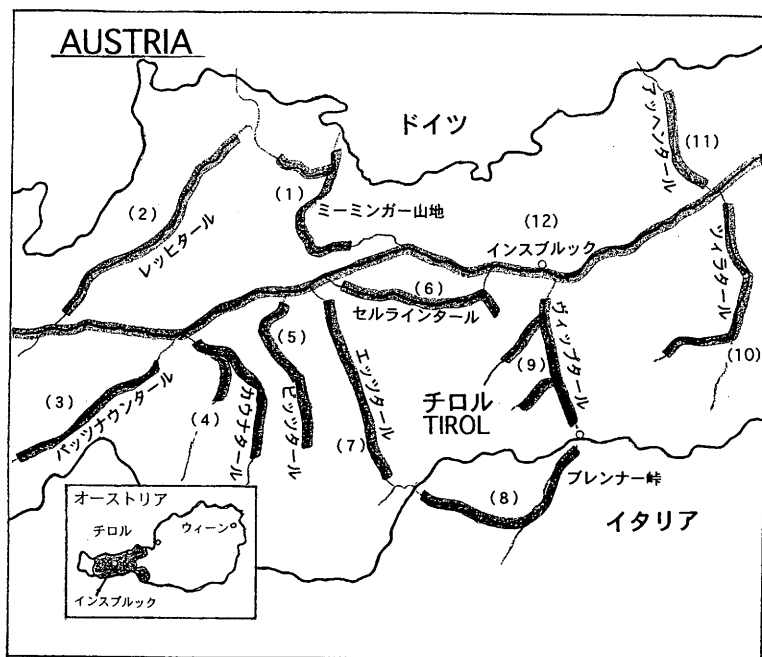
それとは反対に、西寄りにあるエッツタール付近の谷の十字架像のキリストの表情には、ツィラタールと比較

して、その苦悶の表情にありありと違いが見られた。首を深く垂れたキリスト像を見ていると、一瞬慄然となるようであった。ここには死の安堵などと云う表情は影も形もない。この谷はツィラタールとは違って、溪谷が非常に狭く、岩山むき出しの山際にかじりつくように集落が作られ、フェーンの熱風の恩恵も無く、大変自然環境の厳しい谷であるからであろう。自然と死闘を繰り返えさねばならない運命にあるからなのだろうか。

その他マリア像や聖人像も祀られてはいたが、あくまで脇役であった。しかし、橋の袂に設置されている祠型や巣箱型のビルトシュトックは、聖人像であり、これは橋を守る聖人が決められているようである。

民間信仰は、他の国では時代とともに様々に習合と変化を繰り返し、複雑化している面が如実に現れていたが、ここチロルの谷では、純粹にキリスト教を基盤とし、成り立っているの、路傍のビルトシュトックには緻密さがそのまま現れていた。

チロルの人々は、厳しい気候風土を黙って受け止め自然を耕し自然の中に種を蒔き、それらを汗をして収穫する自然のサイクルの中で生きることに喜びと感謝を忘れない人々なのだろう。どんな枝谷の小さな集落へ行っても教会（小さな礼拝堂）を中心とした集落の佇まいがあった。そして田舎道や牧草地にはビルトシュトックが必ず



〔地図1〕

建っており、裏山に登れば木の幹にキリスト像が掲げられていた。ここチロルが信仰に満ちた土地柄であることが窺われる。

参考文献

- 1) 松田松二「環境科学者の見たチロル」1998 山と溪谷社
- 2) 小谷 明「チロルパノラマ展望」1994 新潮社
- 3) ライアル・ワトロ「風の風物詩」1985 河出書房新社

- 4) ミシュラン・グリーンガイド「オーストリア」1999 実業之日本社
- 5) 津田正夫「TIROL チロル案内」1968 暮しの手帖社

謝 辞

調査資料作成のためドイツ語のご指導を賜りました横尾信男教授に感謝申し上げます。

Summary

In Tirol, a large number of Bildstocks have been Set up on the roads in the Valleys.

Those Bildstocks have great variety of shapes, mainly crucified Christ.

Natural environment of Valleys in Tirol is very harsh and I considered the relationship between the life of people and Bildstocks in that condition.